

## がんばる！亶理。復興に向け「むすび丸」いざ出陣！！



亶理町で“米粉パン”を製造販売している“工房あえり”の佐藤美津子さんは、奇跡的に津波による浸水は免れましたが、地震により自宅や工房に被害を受けました。停電や断水により一時は生産を断念しかけてましたが、お客様にも励まされ、水を仙台から調達してパンの製造を続けてきました。

今回、亶理地域の復興に向けて頑張っている方々を励まし「亶理の底力ここにあり」との心意気を示したいと、6月1日から「むすび丸」をモチーフにした米粉パン「がんばる！亶理むすび丸」を新発売しました。米粉生地のもっちりした食感を生かし、低温でじっくりと焼き上げた柔らかいパンで、いちごジャム入りと、きんぴらごぼう入りの2種類があります。佐藤さんの「亶理をなんとか元気にしたい。被災した皆様にも求めやすい価格にしたい」という思いから、価格は各2個入りで240円(税込み)となっています。売上の一部は町の復興のために亶理町災害義援寄付金として寄付されています。



お客様からの「鮮やかな黄色の前立てとむすび丸の表情がいい」「私もがんばろう。勇気をいただいた」との感想に、佐藤さんは復興に向けた気持ちを新たにしていました。このパンは、亶理町内の直売所おおくまふれあいセンターで毎日販売されています。むすび丸パンは数に限りがありますので、

確実に入手したいときは、前日までに予約されるとよいでしょう。

【問合せ先】 おおくまふれあいセンター 営業時間 9:30-19:00 TEL.0223-34-9687

## 閉上に一番に帰るのは朝市でありたい ～ゆりあげ港朝市～



名取市の閉上地区で、毎週日曜日と祝日に開かれていた朝市が、イオンモール名取エアリ西側駐車場に会場を移し、毎週日曜日に開催されています。朝市を主催しているゆりあげ港朝市協同組合の櫻井広行代表理事は自身も津波で、自宅と水産加工場を失いました。妹の家に避難したものの、避難所で食事がパンしか出されていない状況を知り、漬物やそば、麵つゆなどを仕入れ、トラックで避難所に届けました。また、避難所から自宅へ戻った住民が、買い物に苦労していることに心を痛み、「野を越え、山を越え、必要なものを持ってきて売る」という気持ちで、朝市の復活に臨みました。

朝市では、生活資材を販売するだけでなく、地震直後の閉上の様子を収めたビデオを上映するなど、停電のため当時の様子を知ることのできなかつた住民に、情報提供を行っています。また、安否確認情報コーナーでは、涙ながらに再会を喜び抱き合う住民の姿が

見られるなど、“会いたい人に会える場所”としての役割を果たしています。

櫻井さんは「(閉上に) 来ても大丈夫だということアピールするためにも、1年以内に元の場所で朝市を開きたい。道路が整備されて、電気、水道が復旧して、駐車場を確保できれば、1番に閉上に帰るという気持ちでいる」と、今後の意気込みを話してくださいました。

## 宮城県農業高校「奇跡の牛」共進会で見事2位に！



地震に伴う津波から奇跡的に生還した宮城県農業高校の乳牛が、6月20日にみやぎ総合家畜市場（美里町）で行われた“宮城県同志会ホルスタイン共進会”で、未經産牛の部のリザーブグランドチャンピオンに輝きました。同校は、津波により、牛舎で飼育していた34頭のうち20頭を失いました。また、牛舎が倒壊したほか、搾乳ができないなど、多くの被害を受けました。そのため、乳牛は色麻町にある加美農業高校に避難させていましたが、同校の生徒たちは片道1時間をかけて

通り、懸命に牛の世話を続けてきました。

共進会には、未經産の部に41頭、経産の部に23頭が出品されました。その中で、津波にも負けず、見事に2位にあたるリザーブグランドチャンピオンに選ばれた同校の“ミヤノウ トイストーリー ローテート”。当日は“奇跡の牛”として、多くのマスコミから取材を受けていました。

## いちご産地の復興に向け前進！！ ～栃木県から“いちご苗”無償提供～

地震に伴う津波により、東北最大のいちごの産地である亶理町、山元町は施設の約95%が倒壊・冠水するという壊滅的な被害を受けました。

そのような状況にもかかわらず、地域の生産者は「何としても産地を復活させ、今年のクリスマスには出荷を間に合わせたい」と懸命に施設や農地の復旧作業に取り組んでいます。

しかし、津波で被害を受けたのは栽培施設だけではありませんでした。今年秋に植え付けする苗の親株もまた被害を受け、いちごを栽培したくても苗がないという現実がありました。

J Aみやぎ亶理では、そうした状況を打開しようと、関係機関の協力を得ながら県内及び県外に苗の提供を呼びかけました。その甲斐もあり、日本一のいちご産地である栃木県から、“とちおとめ”の苗100万本を無償提供していただける運びとなりました。

これを受けて、6月13日と15日の両日、J Aみやぎ亶理のいちご生産者と関係機関等の職員が栃木県を訪れ、収穫の終了したほ場から、いちご苗の採苗を行ってきました。午前8時から午後6時までの長時間に及ぶ熱心な作業により、2日間での苗確保目標数である30万本をほぼ確保することができました。久しぶりにいちごの作業にあたる生産者も多く、将来への不安を抱えながらも、いちご栽培の再開という希望を胸に、懸命に汗を流していました。また、栃木県の実産者から、復興に向けての激励が多く寄せられ、宮城県の生産者には大きな励みとなりました。

8月上旬には2回目の採苗が行われる予定です。



## 森林の恵。夢と希望を明日へ歩む ～名刺に刷り込んだ強い決意～



黒川森林組合は、黒川郡3町1村を区域とする組合で、二度の合併を経て平成2年5月1日に現在の組合が設立されました。組合員数1,695名を擁し、山の管理をはじめ、製材加工や住宅資材の販売、造園など幅広く事業を展開してきました。厳しい林業情勢の中にあって、平成8年から14年連続して出資配当するなど、安定した組合経営を続けています。

震災による大きな被害はありませんでしたが、被災地の惨状にいたたまれなくなり、震災直後には、組合の所有する重機を使って、無償で被災地の瓦礫撤去にあたりました。

経営者のトップとして、組合を10年以上牽引してきたのが佐藤豊彦組合長です。その経営手腕とは裏腹の佐藤さんの描く叙情豊かでのぼのとした絵を見ると、誰もがほっとした気持ちになります。震災を契機に、組合長の名刺には“お互いに手を携えながら笑顔で作業をしている人々の姿”と“森林の恵・夢と希望を明日へ歩む”とい

う復興に向けた強いメッセージが刷り込まれました。

組合では、被災地の瓦礫に混じった大量の木材の利活用に着目し、仙台地域における木質バイオマスエネルギーの供給体制づくりを進めています。また、瓦礫の木材をチップ化して牧場の堆肥に利用し、がれき処理のスピードアップと牧草地の土壌改良を狙った取組にも組合傘下の企業が携わっており、今後の成果が期待されます。

## 津波で被害を受けた農地のがれきを撤去しています！

宮城県内における地震・津波被害により発生した災害廃棄物量は、1,500～1,800万トンと推計されています。

災害廃棄物処理については、市町村が事業主体となりますが、各市町村からの要請を受け、地方自治法に基づく事務の委託により、県が処理を行うこととされています。

被災後、各市町村では、災害廃棄物除去を行ってきましたが、その膨大な量により、農地部分まではなかなか手が届かない状況にありました。

今回、仙台管内2市3町（名取市、岩沼市、亶理町、山元町、七ヶ浜町）の要請を受け“農地・農業用施設等”の一次仮置場までの災害廃棄物除去を当所農業農村整備部が実施することとなり、被災者雇用を行いながら、現在工事を行っています。

スピード感を持ちながら農地の丁寧ながれき撤去を行うことにより、地元農家が望む農地の除塩・農業施設災害復旧事業等を早期に進められるよう尽力します。また、農地のいち早い復旧により農業に従事される方のやる気や希望を損なわず、農業・農村地域の復興に取り組んでいきたいと考えています。



## (有) 耕谷アグリサービス (名取市) 除塩実証ほ設置



名取市の(有)耕谷アグリサービスでは、農業機械メーカーの(株)クボタと亘理農業改良普及センター(以下普及センター)、農業・園芸総合研究所(以下農園研)と共同で、水田における除塩実証ほを設置しました。(有)耕谷アグリサービスは、これまで同市内の農地を集積し、大規模に水稻、大豆、麦を生産していましたが、地震に伴う津波の浸水により、ほとんどのほ場で農作物の作付ができない状況になりました。

また、名取市では農業用排水路や用排水機場の多くが甚大な被害を受け、農業用水を活用した除塩作業が難しい状況となっています。

このような中、雨水と農業機械を活用した営農的手法により除塩を行い、その効果を確認するため、除塩実証ほを設置しました。

除塩方法は雨水を効率的に水田にしみこませ、これを暗きょ(水田に埋設している排水管)によりほ場外に排出するという方法です。農業用水を使わず、自然の降雨を活用するため下流域への負担が少なく、条件が合えば多くのほ場で取り組めるのではないかと期待される方法です。今後、普及センターと農園研で継続的にEC(電気伝導度)等を計測し、効果の検証を行いながら、水田の除塩を進めていきます。

## 被災農家、苦渋の選択で北海道へ ～いちごの生産再開を目指して～

亘理町の被災農家が、北海道の伊達市でいちごの栽培技術の研究・開発等を行うことになりました。これは、姉妹都市の伊達市からの申し入れにより、亘理町産業観光課がいちご被災農家とのマッチングを行い、実現したものです。5月下旬に農家9名とJA担当者及び町職員が実際に現地を視察し、視察者を含め6戸の方々が応じることになりました。

現在、伊達市では1戸のいちご農家が生産を行っていますが、生産拡大を図るため、先進地亘理町の生産者を指導者として招き、2年間で栽培技術の確立や品種の選定を行ってもらうとします。被災農家の方々はこの間、市またはJAの臨時職員として働くこととなります。栽培技術を確立した後は、いちごを販売し、収入を確保することも可能とのことです。

本来であれば、地元での営農再開を希望するところですが、住宅や農地の被害を受け、早期の営農再開が難しい状況であることから、亘理町を離れるという苦渋の決断をしたものです。住居については市が用意し、7月上旬には第1陣の4戸が移住する予定です。慣れない土地での生活や生産活動には苦労も多いと思いますが、農家の方々のご活躍を期待するとともに、亘理町での早期営農再開を願っています。

★ 仙台・宮城元気ニュースは、宮城県の復興を目指す皆さまに少しでも元気になっていただけるよう、仙台地域の明るい話題や元気な人の情報を発信していきます。読者の皆さまからのたくさんの明るい情報をお待ちしております。

お問い合わせ先

宮城県仙台地方振興事務所  
地方振興部(担当:鈴木、高橋)  
(HP)

<http://www.pref.miyagi.jp/sdsgsin/>

(E-Mail)

[sdsinbk2@pref.miyagi.jp](mailto:sdsinbk2@pref.miyagi.jp)

(TEL) 022-275-9140

次号は7月中旬に発行します!!

